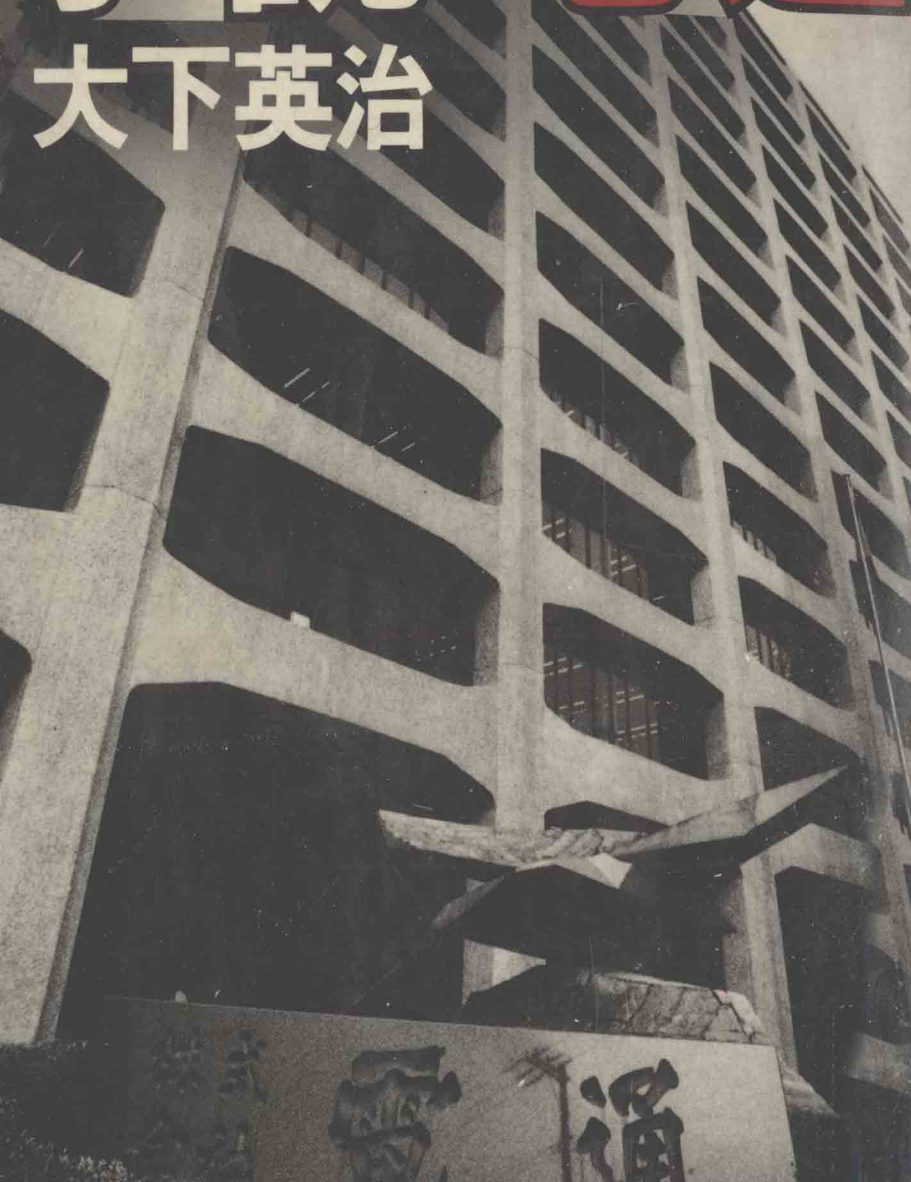


# 小説 通電

太下英治



# 小説電通

下英治

おおした せいじ  
大下 英治

1944年生まれ

広島大学文学部仏文科卒

大宅マスコミ塾第7期生

1969年から週刊誌記者となり、現在に至る

『小説宝石』『スポーツ・ニッポン』等に小説を発表

小説 電 通

Printed in Japan

1981年 9 月 30 日 第1版第1刷発行

1981年 12 月 15 日 第1版第6刷発行

著 者 大 下 英 治

©1981年

発 行 者 菊 地 喜 三 次

印 刷 所 岩 村 田 活 版 所

製 本 所 東 京 美 術 紙 工

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電 話 03 (291) 3 1 3 1-5 番

振 替 東 京 9-8 4 1 6 0 番

郵便番号 1 0 1

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

小説  
電  
通



1

出版社系週刊誌の中では一、二位を競う『週刊タイム』の専属記者石岡雄一郎は、紀尾井町に聳える超高層ホテル『ニュー・オータニ』新館玄関前でタクシーを止めた。

タクシーを降りると、足元から凍るような冷たい風が這いのぼってきた。ひどく底冷えのする夜だった。

△雪になるな……▽

石岡雄一郎はそう思いながら、まばゆい光線に包まれた華やかなアーケードに足を踏み入れた。ジングルベルの曲がリズムカルに流れている。楽しそうに腕を組んでいる若いカップルがあふれていた。

石岡は、一階アーケードの奥にあるエレベーターへと急いだ。六階にあるバー△シェラザート▽へ行くためであった。

エレベーターの前に立つと、腕時計を覗いた。週刊誌記者という職業柄、どうしても時間には神経質だっ

た。八時五十六分であった。その夜九時に、石岡はそのバーで、電通の安西則夫参事と、星村電機の小林正治広告部次長に会う約束をしていた。三人は西北大学時代の広告研究会のメンバーであった。

エレベーターが開き、乗り込んだ。その瞬間、石岡は訝しそうな顔をして振り返った。擦れ違いに降りていった人物をよく知っていたことと、その組み合わせが妙だったからである。

一人は石岡の所属する『週刊タイム』のデスク鬼頭忠男であり、いま一人は、確か電通の船村俊介に間違いなかった。

△二人はどういう繋がりなんだろう？ 船村は最近マスコミとの接触をほとんどしなくなったと聞いているが……▽

石岡はこれから会う安西に、船村の電通での最近の動きについて聞いてみようと思った。

石岡は六階で降り、△シェラザート▽に入った。トレンチコートを脱ぎながら、薄暗い店内を見回した。店内は、ほとんどが男女のカップルだった。テーブルの上のキャンドルにはの赤く染めた顔をくっつけ合い、楽しそうに語り合っていた。

安西も小林も、まだ来ていないようだった。念のため奥の方へも歩いて行き調べた。やはり二人とも来ていなかった。おたがい忙しいのであろう。

石岡は右手一番奥のテーブルに座ると、ウイスキーの水割りを注文した。トレンチコートのポケットから缶入りピースを取り出した。ペン牒<sup>なこ</sup>の目立つ指で煙草を抜き出し、デュボンのライターで火を点けた。まず一服深く吸いこんだ。一日取材で走り回った激しい疲労が、煙草の煙とともにゆっくりと溶けて流れてゆくようだった。

石岡は煙草を吸いながら、神経質そうな鋭い眼を窓の外に放った。彫りの深い浅黒い顔には、疲労が刻みこまれていた。

窓の外には、赤坂の夜景が広がっている。鹿島建設のビルが、眼の前に見える。暮の迫り込みで残業に入っているであろうか、上の方の階は、まだ煌々と灯が点いていた。そのビルの向こうには、赤坂東急プラザホテルが不夜城のように美しく輝いていた。

石岡雄一郎は運ばれてきたウイスキーの水割りを飲みながら、あらためてエレベーターに乗るとき擦れ違った電通の船村俊介に初めて会ったときのことを思い

出した。

△あれは十年前のことだったろうか……▽

その頃の石岡は、いまのようなフリーライターではなかった。誠学社の正社員で『月刊世相』の編集部員だった。入社して四年目で、仕事が面白くてたまらないという時期だった。まだ正義感に燃えていた。マスコミを通じて社会の不正を暴いていける、という信仰に近い気持を抱いていた。

台風の近づいている激しい雨の夜、石岡は新宿歌舞伎町の馴染<sup>なじみ</sup>のクラブで、谷沢竜海と飲んでいた。谷沢は蟾螂<sup>かまきり</sup>のように瘦せた、五十過ぎの男だった。谷沢は石岡のところに時折情報をタレこんでくる便利な男だった。

そのクラブへ谷沢の友人と名乗る得体の知れない雰囲気を持った男がふらりと現われ、谷沢に石岡を紹介してくれるよう頼んだ。海坊主のように頭をつるつるに剃ったその男は、巨体を持て余すようにしてボックスシートに座わると、名刺を差し出した。名刺には、△現代広告新聞社社長 青山耕太郎△とあった。あとで思いついたことだが、その男は偶然にそのバーで谷

沢に会ったのではなく、彼と谷沢がそのクラブで会うことを知っていて、いかにも偶然に会ったように見せかけたに違いなかった。

青山という男は、しばらくしてあたりを警戒するように見回すと、石岡の耳に口をつけ囁いた。

「きみのところでは、カントリー・ウイスキーのスキヤンダルは書けんだろうね」

それはいかにも挑発するような口振りだった。まだ若く正義感に燃えていた石岡は、ついむっとした。

「どこのスキヤンダルだって、書けます」

「そうかね。では、とび切り面白いスキヤンダルを教えよう」

青山はそれが癖らしく、口の端に唾液をためながら、呟くように、

「カントリーの東京支店に、黒田善寿という宣伝係長が最近までいた。が、こいつが悪い奴だな。あまりに悪いのでついに、懲戒解雇になった。奴の行状記がいまいろいろと囁やかれていて、カントリーもイメーシダウンになっては大変、とあわてふためている。黒田のやり口というのが、なかなか知能犯な……」

青山は、黒田の手口について細かく説明し始めた。

「外車を購入した代金をテレビ局に払わせるなど朝飯前で、スポット広告の料金の誤魔化しまでやっていた。なにしろ電波は跡が残らない。一日に二〇本放送するつたって、記録してなけりゃあチェックのしようもない。たいていは約束ごとで記録なんて残してやしないんだ。そこで奴は、広告代理店に二五本の請求書を出させて、実数との差額はポケットに入れる。一〇秒のスポットなら一五秒とさせて、この差額も懐へポイ。おまけに、スポットは需給の関係で、AタイムとBタイムの値段はぐんと違ってくるだろう。これも同様の手口で懐にポイ、さ」

「しかし、そんなことは彼一人ではできないでしょう。広告代理店の協力がなくては……」

石岡は、つい青山の話に引き込まれながら訊いた。「うむ、それだ。電通などの大手筋はさすがにそんな協力はしない。そこで彼は、小さな代理店との取引きをどんどんふやしていった。なかには看板もかけていないような代理店にまで間口を広げたらしい」

しかも、それらの広告代理店からもみみっちく金を稼いでいたという。

九州などへ出張するときも、黒田は出入りの広告代



理店の担当者にいう。

「急いで出張しなけりやならないけど、航空券はないかなあ……」

出入り広告代理店にすれば、そういわれて黙っているわけにもいかない。さっそく買い求めて届ける。

ところが黒田は、そのことをひとつの広告代理店にいっただけではなかった。十くらいの広告代理店に、同じことをいっていた。そして十枚もの航空券を懐に入れ、羽田のカウンターで厚かましくも余分の航空券を払い戻ししてもらっていた。手当たりしだい何でも金にしたという。

「そんなに稼いで、何に使ってたんですかね？」

石岡は、身乗り出すようにして青山に訊いた。

「世田谷に時価三〇〇〇万円の豪邸を建てていたんだ。

人呼んで「黒田御殿」という。それとあとは女だな。

銀座の女から女優、片っ端から手をつけていた。そちらの方は、おたくで調べるんだね」

石岡は思わぬタネが仕込めたことに興奮をおぼえた。

石岡は翌日、『月刊世相』の渡辺正明デスクにカントリ・ウイスキーの「黒田事件」について報告をした。猪突猛進型の渡辺デスクは、その話に飛びついた。

石岡はさっそく取材記者を集め、細かい指示を与え、取材にあたらせた。

取材した結果、噂はほとんど事実だった。翌月号の「ショッキングレポート」でやることに決定した。

ところがどこで嗅ぎつけたのか、電通から待たがかかった。しかし、せっかくの面白い材料だ。渡辺デスクも、

「あとのわずらわしい問題は俺が引き受ける。取材を続行しろ！」

と、強行突破するよう命じた。

石岡が電通の船村俊介の名を耳にしたのは、その後だった。

取材記者たちとの打ち合わせを終えて社へ帰って来た彼と入れ違いに、渡辺デスクが出て行くところだった。玄関の前で擦れ違った。

「どちらへ？」

石岡が訊くと、渡辺デスクは足を止め、彼を手招きし、いった。

「実は電通の新聞雑誌局の船村次長から先程電話があつて、ぜひ会いたいという。一応会ってくるよ。おそらく例の件で、なんとか記事を差し止めてくれという

んだらう。いくら泣きつかれたって、止めるつもりはないが……」

石岡は渡辺デスクを見送りながら、差し止められればいっそうファイトが湧くという、ジャーナリスト特有の血の騒ぎをおぼえた。

「へっかく苦労して集めた材料だ。いまさら止められるものか!」

翌日、石岡は渡辺デスクが出動して来るなり、昨夜の結果を訊いた。

渡辺デスクは、応接室へ石岡を連れて行くと、意外なことを告げた。

昨夜あれから、当時はまだ銀座にあった電通本社へ行くと、すでに車が待たせてあったという。船村は彼を新富町の行きつけらしい料亭へ案内した。芸者が来る間、船村はさっそく彼に念を押した。

「渡辺さん、例のカントリー・ウイスキーのスキヤンダル、おたくは本当におやりになるんですか?」

「ええ、やります」

渡辺は、一步も譲らない気持で答えた。

「そうですか。『週刊未来』も『週刊正流』も、取材に駆け回った挙句、しまいには降りてしまった。残る

はおたくだけです」

渡辺は、週刊誌がそんなに動いていたことを、このときはじめて知った。ただ、喰いついたらしぶとく喰い下がることで定評のある『週刊正流』までが降りたことは、意外だった。思わず訊き返した。

「どうして、『週刊正流』まで降りたんでしょね?」

「あそこは、作家の山田誠さんが長年『男性画帖』を連載しているでしょう。彼が、どうしても今回のことを記事にするなら、連載を降りる、とまでいい張ったという話です。『週刊正流』としても背に腹はかえられず、ついに降りたということじゃないですか……」

山田誠は、同じく作家の海高猛、画家の松原善平とともに、かつてカントリーの宣伝部に籍を置いていた。世話になったカントリーが傷つくことを黙って看過すわけにはいかなかったのだろう。

「渡辺さん!」

船村はいよいよ渡辺に詰め寄ってきた。渡辺は当然、何としても記事をとり止めてくれ……と泣きつかれると思った。ところが、船村の口からは、渡辺の予期せぬ、まったく意外な言葉が飛び出した。

「みんな腰砕けになって、残るはおたくだけです。ぜ

ひおやりなさい。やるべきです。あんな薄汚い男が広告界と繋がついていたなんて、広告界の恥です。膿は徹底的に出すべきです。カントリーの圧力なんかに負ける必要ありませんよ」

船村はまるで、渡辺をけしかけているようだった。渡辺には船村の態度がどうしても解せなかった。やがて芸者が入ってきて歌って騒いでも、胸の奥にはいつまでも何かが悶えていたようだった。

新富町の料亭を出ると、船村に借りを作ってあとでまずいことになってもいけないと思い、今度は渡辺デスクが船村を銀座のクラブで接待して帰ったという。

話を聞いた石岡も、船村の動きの真意を掴みかねた。

「船村さんの動きの裏に、何があるんでしょうね」

「さあ、今朝も社へ来る途中考えてみたが、やはりわからん。そのうちおのずと結論が出るだろう」

ところがその日の夕方、もっと意外なことが起こった。船村が社にやって来て、今度は渡辺デスクだけでなく、戸川編集長にも会い、

「カントリーの件は、何が何でも取り止めていただきたい！」

と押えに回ったというのだ。

ぜひやるべきです、と帰っておきながら、一夜にして、手の裏を返したように何が何でも取り止めていただきたい、という。

その夜石岡は、渡辺デスクから船村の豹変ぶりを聞き、少しはこの社会がわかつてきたつもりでいたがまだ自分のような経験の浅い者には推し量れない奇々怪怪なことがある……とあらためて唸った。

石岡は、船村を応接間に案内したとき見せた一見柔和そうだがいかにも裏では策を弄しそうな癖のある瘦せた顔を思い浮かべながら、渡辺デスクに訊いた。

「それで、記事は止めてしまうんですか？」

やはり電通につむじを曲げられると怖そうだった。

誠学社は『月刊世相』だけでなく、『週刊美貌』という女性週刊誌も出版している。もし電通に広告を全面的にストップされると、血液を止められたようなものだ。誠学社は仮死状態に陥る可能性がある。

「いや、いまさら引き下がりはいしない。ただドキュメントでなく、小説という型にして作家に書かせることにした」

一応は一步後退したわけである。

しかし、カントリー側はそれでもおさまらなかった。

翌日、遂にカントリー・ウイスキーの社長まで誠学社に姿を現し、誠学社の社長に面談を申し込み、記事の差し止めを要請した。

一宣伝係長のスキャンダルに、社長まで登場してくるといふのは尋常ではなかった。

△やはり、あのことを恐れているのだろうか……▽  
石岡は取材原稿の内容を思い浮かべながら、そう思った。実は、あれだけの使い込みは黒田一人では不可能ではあるまいか。会社の上司とつるんでいたのではないか……との噂がのぼり、黒田の直系の常務の名前までが上っていた。石岡はカントリーの常務ともあろうものが黒田とグルだとは信じなかったが、噂は燻り続けていた。カントリーとすれば、一宣伝係長の使い込みなら会社側は被害者ですむ。しかし常務の名前まで上がれば、被害者ではすまされなくなる。たとえそのような事実はなく噂であったにせよ、大変なイメージダウンになってしまう。カントリーの社長はそのことを恐れているのではあるまいか……。

編集部としては、電通、カントリーからの働きかけがあつてもなお、小説として発表する姿勢は崩さなかった。

ところが、遂に広告主協会の会長までが誠学社に姿を現した。『月刊世相』の記事さえ差し止めれば、スキャンダルの火は断てる、と最後の切り札を使つてきたのである。

広告主協会会長のお出まし、ともなればそれ以上の抵抗も難しかった。カントリー、電通側と、誠学社との間で手打ちがおこなわれた。

その夜石岡は、そもそも騒わぎの発端になる「黒田事件」の情報を聞きこんだ場所である新宿歌舞伎町の馴染のクラブで、渡辺デスクから事の顛末に関する報告を受けた。石岡は、悲しさとも、虚しさとも、憤怒ともつかぬ、複雑な感情に襲われ、しばらく茫然としていた。

石岡はヤケ酒を呷り、渡辺デスクに食つてかかるように訊いた。

「どういふ条件で手打ちになったんですか？」

「ふむ……上の方の話し合いで、一年契約で一ページの  
カントリーのカラー広告が入ることになった」

「止めるなら、いっそのこと、そんなケチな証拠を残さなきゃ、いいじゃないですか！ まるで、こっちの貞操を売るようなもんじゃないですか！」

石岡は取引き条件の話を聞いて、広告界、マスコミ界の隠された恥部をはじめて目の当たりに見せつけられた気がし、吐気をおぼえた。目に見えない何者かに翻弄された気がした。石岡は「腐っている……腐っているよ」と呟きながら、カウンターを叩き、前後不覚に酔いつぶれていった。

それから間もなくしてだった、石岡が信じられないような話を耳にしたのは。広告界の情報に詳しい小さな代理店の社長川崎哲朗が、石岡にこう囁いたのだ。「電通の船村と、カントリーの黒田事件をマスコミに触れ回った青山という男は、前々からの仲間<sup>グループ</sup>で、実は今回のマスコミ騒ぎも、はじめから仕組まれた劇だったんだよ」

カントリーの広告は電通扱いもあったが、比率が少なかった。なにしろ黒田が間口を広げていたものだから、群小広告代理店が群がっていた。電通とすれば、もっとカントリーの枠を広げたがっていた。そこに黒田事件が起こった。嗅覚の鋭い青山がさっそく嗅ぎつけ、船村の耳に入れる。それから筋書きがつくられ、さっそく青山がマスコミに触れ回りはじめる。情報に飛びついたマスコミは、カントリーに取材に行く。火

を点け終わった青山は、今度は頭を抱え込んでいるカントリーの広報に出掛け、担当者<sup>担当者</sup>に耳打ちする。「ここまで話が大きくなれば、電通に頼んでモミ消してもらうしか、手がないでしような」

かくして電通の船村新聞雑誌局長の登場となる。つまりは、自ら火を点け、消火作業にもあたる。マッチポンプ作業をするわけで、人呼んで船村次長と青山ら取り巻きを称して「Fマッチ・ポンプ集団」と呼ばれているという。

石岡には川崎の話が信じられなかった。ただ川崎の話信ずるならば、船村が渡辺デスクに新富町の料亭で示した奇怪な態度の謎が解ける気がした。船村は渡辺デスクを煽り、炎をより大きくさせた。そうしておいて、消火の値段をより高くつり上げた。確証はなかったが、石岡にはその考えがあながち間違いとは思えなかった。

川崎はにやにやしながら、こう付け加えた。

「カントリーの電通の扱いが占める割合を詳しく調べてもらなさい。火消し料がわかりますから。おそらく黒田時代に群がっていた小さな代理店はみんな整理され、電通に回ったことは確かだね」

彼によると、K F マッチ・ボンブ集団が狙う相手は、同業他社の広告代理店がメイン代理店になっている企業に限られ、スキャンダルを流された企業のイメージは傷つけられ、その企業のメイン代理店の立場も悪くなる。そこに電通が救世主のように現われ、ボンブ役を果たし、それまでのメイン代理店に取ってかわって、新たにメイン代理店となる。そしてひとたびクライアントになった企業に対しては消火作業専門にあたる、という。

石岡はなお、半信半疑であったが、川崎の話し振りは確信に満ちていた。

それから半年後だったろうか、あるいは一年後だったかもしれない。突然、『週刊正流』に「K スボンサー三悪人」を囁かれる黒田のワル行状記」という特集記事が掲載された。

どうしていま頃……石岡は特集記事を隅々まで読んでみた。その記事によると、カントリー側はついに黒田を告訴に踏み切っていた。つまりスキャンダルは黒田一人で食い止められ、幹部にまで波及しない、と判断したからであろう。あくまで会社は黒田に騙された被害者になれば、黒田告訴の大義名分は成り立つ。確

かに『週刊正流』の記事でも、「会社側にも何かあるのではないか」という声は今もって消えない——とあるが、それ以上の銚先は、会社側に向けられていない。もっぱら、黒田の金と女の行状記に焦点が当てられていた。

石岡は読み終わって、待てよ……と思った。もしかすると、この記事は、カントリー側と『週刊正流』との了解のもとで作成されたのではあるまいか。それまでも噂は燻り、業界紙には秘密めかして書かれていた。もし幹部にまで銚先が向かわないなら、燻る噂に終止符を打つためにも、うるさいことにかけては週刊誌界で最右翼の『週刊正流』でやっておく方がいと考え、告訴もし、記事にもしたのであるまいか……。

『週刊正流』のファンである石岡は、そこまで疑いたくはなかった。しかし、あの件以来、広告界とマスコミ界を見る眼が変わっていた、というより変わらされていた。その記事への疑問も、あくまで邪推でなく、間違いない、と信じていた。

しかし、そのK カントリー黒田事件も、昨年で一応法的な決着はついたようだった。△元カントリー係長に懲役四年 大阪地裁実刑判決 C M 料水増し詐

欺〽という見出しで、昭和五十三年六月二十四日付の毎朝新聞夕刊だけに報じられていた。

「カントリーの元宣伝担当係長が、広告代理店の担当者と共に、テレビCM料をカントリーに水増し請求し、一億円以上をだまし取っていた詐欺事件の判決公判が二十三日朝、大阪地裁刑事七部であった。高橋太郎裁判長（現在神戸地裁姫路支部長判事）は『地位を悪用して巨額の金をだまし取った罪は重い』と、主犯の東京世田谷区玉川上野毛町八五、元カントリー東京支社宣伝第一課係長、黒田善寿（四八）に懲役四年（求刑同七年）の実刑、共犯の豊中市宮山町二の二三〇、元ニッテンエージェンシー常務取締役、上野隆（五二）に懲役一年、執行猶予二年（求刑懲役一年六月）を言い渡した。

判決によると、黒田は上野と共に、四十一年五月、ニッテンエージェンシーがフジテレビと日本教育テレビ（現在のテレビ朝日）から一カ月分のスポット料金計九百万円の支払い請求を受けたのに、二百五十万円水増しして千百五十万円をカントリーに請求、同額の約束手形をだまし取り、水増分を山分けした。

このほか二人は、これらテレビ二社のほか毎日放送と関西テレビの計四社のテレビCMについて、三十九

年五月から四十一年十月の間、二十六回にわたり約三千四百万円の水増し分をカントリーからだまし取った。さらに黒田は、ニッテンエージェンシー以外の中小広告代理店四社の営業課長クラスを抱き込み、三十九年から四十一年にかけ前後八十三回、計約八千万円のCM水増し分を詐取した。

黒田はだまし取った金で東京に邸宅を構え、美人の映画女優や混血ホステスとハワイなどで豪遊していた

しかし、この事件の記事差し止めを境に、それまでカントリーに喰い込みの浅かった電通が、カントリーに深く喰い込んだというから、この事件は、電通にとって有難かったわけであろう。

それからしばらく経って、かつて石岡にカントリーの黒田のことを吹き込んだ海坊主のような青山が彼に会いに来て、新しい情報を吹き込んだ。

「西洋レヨンの宣伝部長に、ひどい奴がいました。自分のところで使う混血モデルに手を出し、強姦未遂で訴えられよったんですわ」

しかし、石岡は今度は青山の話に乗らなかった。話ができすぎている。どうも眉唾な感じがした。一応は

渡辺デスクに報告はしておいたが、渡辺デスクも、ネタ元が青山と聞いて、「まあ、もう少し静観していいよか」と腰を上げようとはしなかった。

しかし、『週刊正流』と『週刊未来』が動いた、という情報が入ってきた。案の定、まったくのガセネタだったため、記事にはならなかった。

その直後、かつて「F機関のカラクリ」を説明してくれた小さな広告代理店の社長川崎に会ったとき、彼は吐き捨てるようにいった。

「火種のあるところへ火を起こすのなら、まだわかる。火のないところへ煙を立てるのはあまりに悪質だ。真面目で通っている西洋レーヨンの宣伝部長が怒っていたよ。いったい何のためにあんなことするのかね！ てめえの私腹を肥やしたためなのか、それとも大電通の業績を伸ばしたい一心からなのか、とね」

とにかく電通の船村は奇々怪々な人物だった。その後石岡は誠学社をある事情で辞め、『週刊タイム』のフリーライターになったが、船村の名はよく耳にしたが、最近はずも聞かなくなっていた。第一線から退いたとばかり思っていたのに、『週刊タイム』の鬼頭デスクと会ってるところを見ると、またぞろ暗躍をはじ

めたのだろうか……。

石岡がそこまで思い出していたところに、電通の安西が現われた。相当あわてて駆けつけたらしい、息が弾んでいた。石岡は腕時計にチラリと眼をやった。九時三十五分である。三十分近い遅れだった。

安西はテーブルに着くなり、遅れたことを詫言した。

「すまん、新しいスポンサーが、新番組に変わるとき、ぜひゴールデンタイムを取ってくれ、というので、これまでのスポンサーとの部門調整に忙しくて……」

「部門調整といえば聞こえはいいけど、ようするに、これまでのスポンサーにお引き取り願って、新スポンサーを嵌めこむ、ということだろう」

石岡は皮肉をいいながら、ボーイを呼び、安西の注文を取らせた。石岡の皮肉は職業病ともいえた。かつて誠学社の正社員だった頃は皮肉をいうことはほとんどなかった。しかしフリーになり週刊誌の仕事に携わるようになってからは、職業柄すべてのものをシニカルに、斜に構えて見る癖がつき、いかに親しい仲間と会っていてもつい皮肉が口をついて出るのだった。

「ところで安西、先程エレベーターに乗るとき、きみ



の社の船村を見かけたけど、彼はいまどんなポストに  
いるんだ？」

「船村？ ああ、あの有名な先生かね。いまは連絡総  
務にいるよ」

安西は太い黒縁眼鏡をはずし、甘い下膨れの育ちの  
良さを思わせる顔をおしぼりで拭きながら答えた。

「出世なのかね、それともはずされたのかい」

「いや、悪いポストじゃないはずだよ」

「ほう、日本一の電通を世界一にした陰の功労者とし  
て、会社はちゃんと報いているというわけかい」

「また、冗談がきついな」

「確かにやり手ではあるが、あれほど悪いことをし  
て、社内でも顰蹙は買っていないのかね。批判はないの  
かね。電通が肥りさえすれば……」

石岡は、あらためて、船村の絡んだ古い「カントリ  
ーの黒田事件」を思い出し、ついむらむらとし語調が  
激しくなった。われながら大人気ない、若いときの癖  
がふいに飛び出してきたな、と心の中で苦笑した。

「いや石岡、そうでもないよ。五十一年の秋、大阪支  
社長になった石川さん（喜美次元専務）がいたろう、石  
岡も一度会ったことのある」

安西はそこまでいうと、石岡の耳に口を寄せるよう  
にして声を低くし、

「じつは、石川さんは、梅垣（哲郎）専務、吉岡（文平）  
専務とともに、ポスト中畑（義愛）の本命だった。石川  
さんは新聞雑誌育ち、梅垣さんはラジオ・テレビ育ち。  
ある時期からテレビが新聞を追い抜き、石川さんも少  
し苦しくなったが、なにしろ実力者だからな。次期社  
長の椅子を狙っていた。が、突然大阪支社長に飛ばさ  
れてしまった。大阪支社長が亡くなったこともある。  
が、真相は、石川さんが「F機関」の上司だったとい  
うことから、社内ではねっ返りが強く、ついに社長  
になれなかったといわれている」

「へーえ。何しろ電通は、今や押しも押されぬ世  
界の大電通だからな。ここまで坂を登ってくるのに、  
いろいろ無理をなさってきた部分は、頰かむりをして  
切り捨てにかかっておいでなわけだ。不沈艦をめざし  
て。ま、世界一の広告会社ともなれば、過去のダーテ  
ィな部分は切り捨て、どこから突つかれても痛くない  
ような態勢を整えるのも、当然かもしれない。が、そ  
れにしても、いまの電通はむしろ、まだまだ過去の古  
い体質をあまりにも引きずりすぎている点に問題があ